

歴史と伝統文化のまち「成田」には、さまざまな分野で活躍した人や郷土の発展のために尽くした人がたくさんいます。先人たちの生き方からふるさと成田の歴史に触れ、未来へ大きく羽ばたく指標となれば幸いです。

第7回 おがわぶへい 小川武平

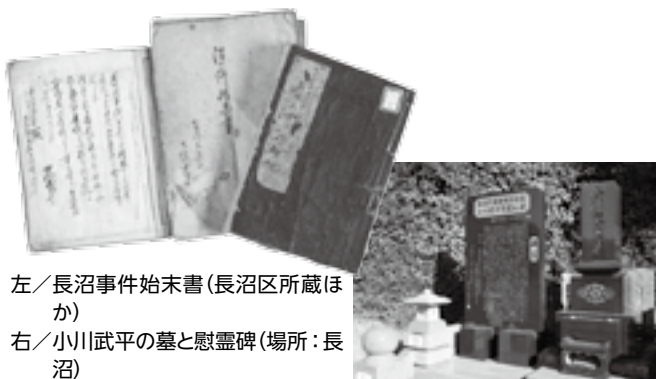
小川武平という人

小川武平は、天保元(1830)年9月13日、埴生郡長沼村(現在の長沼)に生まれた。武平の家は代々、三良右衛門を名乗っていた。小川家は武平に至るまで2代、子どもがなかったため、養子を迎え、3代目になってようやく武平が生まれた。武平は体が弱く、きょうだいもないことから、祖父母や父母は他人の子を引き取って、武平のきょうだい同様に育てた。父の三良右衛門は律儀な人で、人の子もわが子も同じとして、毎朝の草刈りにはそろって早起きさせる習慣を付けさせたという。

当時、村には塾もなく、三良右衛門は武平のために、村内の中村善兵衛という人に読み書きそろばんの教育を依頼し、足掛け8年通わせた。武平は16歳の時、妻のイノを迎え、ともに農業と沼で漁業をしながら、穏やかに暮らしていた。

長沼事件が起こる

長沼村に隣接して「長沼」と呼ばれるひょうたんを折り曲げたような形の沼があった。江戸時代から長沼村の人々は沼で漁業を営んだり藻草を採ったりして生計を立てていた。また、周辺の村にとっても、その地域の排水が流れ込む遊水地として重要な沼であった。しかし、明治5(1872)年、明治維新後の混乱



左/長沼事件始末書(長沼区所蔵ほか)

右/小川武平の墓と慰霊碑(場所:長沼)

天保元年～大正4年(1830～1915)

埴生郡長沼村(現在の長沼)に生まれる。農業と漁業をしながら生計を立てていたが、42歳の時に長沼事件が起こり、村の代表として県に運動を起こした。福沢諭吉の『学問ノススメ』を見た武平は、福沢諭吉の指導を受け、事件を收拾。また、諭吉の協力の下、村に長沼学校を建設した。



に際してこの沼の権利を巡り、長沼村と周辺の村との利害の対立が表面化した。長沼村は、この沼の江戸時代からの所有権を、他村は入会地化を主張し、ここに長沼事件が始まった。このとき、長沼村の百姓代表を務めていた武平は、村の有志と県に出向き村の実情を訴えたが取り上げられなかった。

同7年12月、たびたび県に請願のため千葉町(現在の千葉市)に出ている武平は、夜店で福沢諭吉の『学問ノススメ』を手にする。その内容に感動した武平は、福沢諭吉に長沼事件の收拾を求めて上京し、彼を訪ねた。諭吉39歳、武平44歳のときである。諭吉は農民の武平を温かく迎え、長沼村の所有権回復運動を支持し、請願書の案文を書いたり、県令の芝原和宛てに手紙を送るなどして支援を惜しなかった。

以来、武平は30年近く長沼から三田(現在の東京都港区)の福沢邸を往復し、うち4年間福沢邸に寄宿することもあった。

諭吉の支援と武平や村民の努力により、同9年に沼の借地権が認められ、同33年ついに長沼の無償払い下げが実現し事件は終結した。ほかにも武平は、諭吉の協力により、同14年、長沼学校を建て教育事業に尽力した。

晩年は沼の渡守を経て、大正4(1915)年8月、86歳で波乱の生涯を閉じた。諭吉と武平に感謝した村民は、同7年3月29日、偉業をたたえる長沼下戻記念碑(『広報なりた』平成29年12月15日号掲載)を建立した。

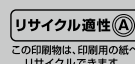
編集後記

ペダルをこぐ力をモーターが補助する「電動アシスト自転車」。暖かくなったら子どもを乗せて出掛けようと、わが家でも購入を検討しています。しかし、注意したいのが事故です。気軽に乗れて便利な自転車ですが、テレビや新聞などで報じられている通り、自転車の関係する死亡事故が発生しています。本紙2ページで紹介している「電動アシスト自転車の注意点」などを守り、安全運転を心掛けたいです。

平成30年1月15日号 No.1355

成田市のホームページ

<http://www.city.narita.chiba.jp>



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。